

とあるトロンボーン団員の回想

2019年某日、今度の演奏会のメインプログラムにマーラー4番が最有力と耳にする。

「4番…？10年以上前にマーラー全集を買って1度だけ聴いたはずだが、トロンボーンの乗り番がないから、どんな曲か全く覚えてない…。」

トロンボーンの無い曲がしばしばメインプログラムになるのはオーケストラの宿命なので致し方ない。そんな時は大抵、トロンボーンが活躍する曲を組み合わせせてバランスを取ってもらうのがアマオケの常である。

「さて、どんな曲を組み合わせてもらおう？メインプログラムはマーラーだから難しい曲なんだろうな。しかも、4番はマニアックだから聴いたことがないお客さんも多いかもしれない。それに、トロンボーンが無い古典的な構成の曲だから、迫力や爽快感のある曲も聴きたいというお客さんもいるかもしれないな。」

これらを総合的に勘案すると、マーラーと組み合わせるべきもう1曲の条件は、自ずと次のとおりとなった。

- ①トロンボーンが活躍する曲
- ②ただし、マーラーの完成度を確保し得る程度にシンプルな曲
- ③しかし、お客さんに迫力や爽快感でも満足いただけるような聴き映えのする曲

「・・・そんな曲あるか??」

そう、オーケストラの曲は、概してトロンボーンが活躍すれば構成が拡大・複雑化し、構成がシンプルであれば相対的にトロンボーンの活躍が物足りなくなる。この二律背反が私を絶望の淵に追いやらんとしていた刹那。

「いや、待てよ?!」

ある記憶が脳裏に蘇る。

「20数年前、無名の名盤の宝庫NAXOSレーベルから、当時無名（今も？）のカリンニコフの交響曲がCD化されて、奇妙な人気を博したな。メロディックな旋律と抒情的な曲調が美しく、それでいてトロンボーンが活躍するダイナミックさが格好よくて、いつか演奏してみたいと思ったっけ。」

「メインプログラムに据えるには、構成がシンプルで演奏時間がやや短いことがネックになって演奏する機会に恵まれなかったけど、むしろそこが今回の条件に見事にマッチしているではないか！」

果たしてこの後、カリンニコフ交響曲第1番がプログラムに組み込まれることとなった。

ここでカリンニコフとその交響曲第1番について簡単に触れておこう。

カリンニコフ（1866～1901）はチャイコフスキーやロシア5人組の次の世代に当たるロシアの作曲家である。彼の家は貧しく、音楽院を学費滞納で退学させられたり、生活費のためにオーケストラで様々な楽器を担当したり（Vn、Fg、時にTimp!）、時には写譜のアルバイトも掛け持つなど、生涯貧困に悩まされた。更に、貧困と過労が祟り、27歳の時に結核に罹患し（前年にチャイコフスキーに才能を認められモスクワのマールイ劇場の指揮者に就任した矢先だった）、34歳の若さでこの世を去ってしまったため、残された作品は多くなく、長らく忘れられた存在だった。

今回演奏する交響曲第1番は、結核療養のため移り住んだヤルタ（ここでの療養生活はラフマニノフら友人の援助があった。）で1894年から1895年にかけて作曲された。循環形式を用いた4楽章構成で、ソナタ形式の第1楽章、歌謡的な第2楽章、スケルツォの第3楽章、第1楽章の印象的な主題が再現されたのち急テンポで盛り上がる終楽章から成る。全体を通して色彩豊かに彩られた美しいロシア民謡調の旋律が聴く者を魅了する。

Tb. T.T.